

フランス・カルチャーのラジオ番組のシリーズ 『精神分析のはなし』

第二話

インタビュアー：自分自身について本当の真理を知ることがこんなにも難しいというのは、いったいどういうことなのでしょうか。

ジャック＝アラン・ミレール：

あなたは家で寝ています。あなたは夢を見ています。あなたは目を覚します。あなたは夢を見たことを知ります。ちょっとしたイメージによる話が展開していて、いわば、あなた自身がひとつのキャンバスでしょう。あなたはその最も些細なことも思い出したり、あるいはたった一言だけ思い出せることもあります、それも構わないことです、それから全然思い出せない、そういうこともあります。ひとが知りたくなくても構いません、しかしながらあなたは夢を見たことを知っています。あなたの内で、です。だからと言って、あなたがその操作をしたのではありません。たとえときには、そういう印象を持つことがあるとしても、です。

そして、あなたは、それが何かを意味していることを知っています。ひとは、長いこと、夢のなかで、ひとつの神が、あなたに語っていると信じてきました。ある人々は、そうです、会いに行きました。ある人々は、そのために支払いました。ある人々は解読することができるとされていました。そしてあなたは、私はいま想像してみます、あなたは寝椅子に横たわっています。かの有名な、寝椅子です。そしてあなたは話しています。それはあたかも、話しながら、あなたを通して、ひとつの神が話しているかのようです。あなたがトランス状態にいると言っているではありません。ぜったいにトランス状態ではありません。寝椅子において、それはよくありません。もし物質を吸収して、誇張するかたちで知覚や物事を変容させた状態なら、分析に来ないほうがよいです。あなたには私が言いたいことがお分かりだと思います。それは勧められません。もしそんな患者が来たら、ぴしゃりと、ほとんどの場合、家に送り返します。それは適していないからです。そういうものです。

もしあなたを通して、とにかく、あたかも神が話しているようであるならば、それは何故なら、結局のところ、そこにはあなたの言っていることを解読する、誰かがいるからです。あたかも、ほら、あなたが言うことは、じつは夢とおなじくらいに神秘的です、と。私は寝椅子について話していました。寝椅子のフェティシズムではありません。精神分析は、寝椅子によって定義されるのではありません。対面で完全に展開する分析もあります。その場合患者は椅子に座るでしょう。患者のなかにはたしかにそのように面接することが必要なひともいます。たとえば、・・これはほんの一例ですが、寝椅子というものが患者にとって、他者のなすがまま、他者の気まぐれに委ねられることを、意味するような場合です。もちろん、それは幻想ですが。

よろしい。しかし患者、患者と呼ばれる人は、分析家のそばに移動するのは確かです。患者はある要求のポジションにいます。そして要求は、実のところ、ある種の断念、ある種の他者への従属を含んでいます。そして寝椅子がそのことを表すこともあります。そして自惚れの強い人たちは、たぶん、他の人たちよりも分析を始めるのに苦労することでしょう。というのは、要求をしなければならないからです。かわいそうな人は彷徨います。誰かに訊ねないとならないからです。・・どうしてあなたよりも上手にあの人はそれができるのか、とか。理由はありません。

しかし精神分析の対象とは、寝椅子ではありません。それはむしろ実は、精神分析家自身です。フロイトが発明したのは、この新しい対象です。誰かが自身からこの精神分析家という対象を作り出すことができるということです。この対象はとても特殊なもので、精神分析家のおかげで、べつの誰か【分析主体】は、完全に稼働状態のひとつの主体であると感じることが出来ます。それは話す主体、自分が望むものを知らないで、自分が言っていることも知らず、誰にそれを言っているのかすら知らない、話す主体です。

寝椅子とはいわば空飛ぶ絨毯のようなもので、この世界から冥府に出発することができるようになります。そのしっかりした対象とは、精神分析家のことです。精神分析家こそが、この件においては新しいことがらです。つまり、夢というものは昔からそこにありました。ひとは古くから誤解に興味があり、夢のなかに意味を探してきました。しかし本当に新しいもの、真の発明は、精神分析家です。

寝椅子とは、まあ、一種のベッドです。それは内部を持たないベッドで、お腹のなかに入るようにはひとはシーツの下に潜り込んだりしません。表面にとどまりながら、ひとは身体をのばします。ひとはむしろ横臥像のようなものになります。それは死を全面的に喚起させ、実際にそのまわりを周回するでしょう。ときにそれは震撼させるでしょう。ボードレールの詩句にあるように、墓のような深さのある寝椅子です。

日常のなかでひとはベッドで自分の身体を再び見つけるものです。その場合、身体は、活動的な生活のなかでは忘れ去られているものです。また、誰かほかの人の身体を再び見つけることも、やはり起こりうるものです。寝椅子とはベッドですが、ひとつの場所をもちます。

こう言えます・・私はこう説明したことがあります。このベッドはひとつのクローケのような場所であって、そこにひとは身体を委ねるのです。あるいはひとはそこで活動的な身体を手放します。またひとはそこで想像的な身体、自身のイメージを手放します。ですから残っているのはもはや第三の身体だけとなります。それは私たちのぼろぼろの服で、主体がそれを後ろにひきずっているものです。

寝椅子はちょっとサミュエル・ベケットのゴミ箱のようなものです。つまりひとは自身の身体をセッションに持っていくかなければなりません。もしひとが行かないなら、セッションは行われません。そして同時に、身体を手放さないとなりません。ですからそれは一種の寝椅子=機械で、その諸特性を身体から切断します。たとえば運動器官機能、行動力も切断しますし、大きくなったり身長—それはとても重要なものです、幼い子どもにおいてはその進化が続くものですから—も切断します。そして寝椅子=機械はまた、見ることの可能性も切断します。それは一種、放棄され、諦めた身体であり、打ち倒された身体です。その身体は寝椅子の上に横たわりますが、それは純粋に話す存在になるためです。ちょっと私がいまラジオにいるのと似ていますね。それはラカンが言った、純粋な、話存在 *parlêtre* になるためです。これはラカンの造語で、彼は無意識という語の代わりにこの話存在という語が用いられるようにいざれなるだろうと言っていました。

自分自身が、パロール（ことば）に寄生される身体という経験をするのです。可哀そうな身体、病んでいる、話す者たちの病いで病んでいる可哀そうな身体。ラカンはじつはその評価の低さ—そこにおいてパロール（ことば）の、真理の内容を維持しなければならないのですが—を言いあらわす

ために、彼は le dire-vain (言う - 空しい)と、寝椅子 divan のことを呼びました。

ですから、ひとつの神、一と言うのは、私が神を無意識の隠喩として取り上げたからですが—ひとつの神が、あなたに夢を見させ、あなたをつまずかせます。それはあなたが時々この小さなかけら、真理の冥界のかけらが、起こるがままにする同意をするために、です。

分析において、あなたはこの真理のかけらを拾い集めることを学びます。そしてそれを、パッチワークのように、縫い合わせることを学びます。真理のドレスを、縫うのです。このドレスは道化役の外套に似ています。

私はよく知っています。智慧は言っています。「本当の真理とは、裸の真理のことである」、と。しかし真理とは裸のものではありません。いや、私がそう想像しているのでしょうか。ひとは真理が裸であると信じています。海から出るヴィーナスのようなものであると思っています。ひとはそれが裸だと思っているのは、真理が美しいと思っているからです。つまりひとは真理とは美しいものであって欲しいのです。でも精神分析で問題となっている真理とは、美しくはありません。それは醜いものです。それは恐ろしいものです。そういう理由で、真理はいわばタン皮のドレスを着ているのです。「ロバの皮」（ペローの童話）のドレスのように、それはきらめき変わりゆくのです。

まずは真理のドレスを縫わなければなりません。それが分析の作業全体であり、分析主体、話存在は、それに取り組むのです。たった一度でも真理が自らのドレスを持つならば、あなたが縫ったであろうそのドレスを、その時、あなたのため、脱ぐことができるのです。あなたは真理が裸であるのがわかるでしょう。ですからあなたはそのスペクタクルに耐えることができなければならぬでしょう。それはあたかもタン皮のドレスを着たプリンセスがロバの皮である自分を発見するかのようです。それが起こるときは、ショックなものです。

そこで、ひとは分析の終わりについて話します。しかし私たちが秘密のメッセージであることは分かっていません。あなたの分析のなかで、あなたはそれらを読むことを学びます。あなたを読むことを学びます。あなたは、あなたが知らずに話している言語を学びます。あるいはむしろ、あの狡猾な神が—ひとはそれを無意識と呼んでいますが—あなたに話している言語、あなたはそれを聞いているとは知らぬままにあなたに話している言語を、学びます。あなたは、あなたの話すラング（ことば、母国語）一たとえばフランス語と仮定します—のなかに隠されている、あなたに向けられたメッセージを読む練習をします。このことばは私たちに共通のもので、しかも私は今この瞬間あなたとこのことばにより結ばれていると感じます。私が知らない、数えることのできないくらい多数のあなたと、です。

私の声が、あなたにとってたんなる物音ではないのは、このラングのおかげで、です。私たちが発明したのではないこのラング=フランス語は、私たちが存在するより以前から、そこにありました。こう言ってよければ、私たちはラングの一時的なお客様です。ラングは私たちの家であり、私たちの住まい、私たちのベッドの住まい、私たちの考え、この身体、そして感覚さえもそこに住んでいます。そして私たちの感情までもがそこに住んでいます。ラングは私たちが発明したのではありませんが、私たちを通して、それはつねに再発明されています。そして辞書がラングに従うのは骨が折れるものです。たとえば、今後は年に一度の出版になるとか。それはたんに商業的な理由によるのではありません。このラングは私たちよりも生きながらえるでしょう。そのラングの広がりは以前より小さいものだと、たとえひとが私たちにたくさん説明したとしても、ラングは生きながらえるでしょう。

「ヨーロッパがフランス語で話していた時」、これは美しいタイトルです。フマゴリ Fumagori という学者の書物の題名です。ヨーロッパで、18世紀のエリートたちは、世界でもっとも美しいことばで会話をしていました。当時はフランス語だったのです。今日、ヨーロッパのエリートたちが、英語のためにフランス語を捨てるというのは確かです。あるいはパラグアイ語より英語をとるということです。世界でもっとも美しいことばとして、誰もこのパラグアイ語を英語のかわりに選ばないということです。私が注目してほしいのはそこです。

英国があり、小さな町があり、コーンウォールという町があります。それは「トリスタンとイゾルデ」の地方です。そこに私はもう30年前のことですが滞在したことがあります。コーンウォールのような小さな町に、ある年老いた人物が生きていたと言わっていました。たいへん高齢の漁師の婦人だったのですが、その人が、ある方言を話した最後の人物でした。そして彼女とともにその方言は消え去ってしまいました。

しかしながら、たとえもうそのラングが死に、今日それを話す人が誰もいなくなつたとしても、ラングは残ります。もしもそのラングが書き留められていれば、その語彙、文法、ひとが構造と呼ぶものは、生き残ります。そしてひとはつねにそれを再び蘇らせることができます。結局、バチカンでラテン語に似たようなものが話されています。ひとは今世紀、ヘブライ語が再び甦るのを見ました。カタロニア語も最近、口承で伝えられたものから書物が書かれ、甦りました。バスク語は再発明され、アイデンティティの強い権利要求の支えとなっています。

よろしい。あなたの無意識は、ひとつのラングのようなもので、生きているうちには誰もそれを話さないでしょう。しかしながらそこにはメッセージが存在していて、それは書かれていて、象形文字のようになっていて、その解読者シャンポリオンを待っているのです。